

第3回目 感想

環境情報学府 環境リスクマネジメント専攻

D2 女

今回の講義では、女性研究者のベテランと若手というそれぞれの立場からのキャリアについて深く考えさせられた。

女性研究者がどんな年齢であっても、第一線でご活躍されていることはとても喜ばしい。女性にとって自分の研究ができる環境が整っていることは良いといえる。藤原先生は横国での研究を第一線でご活躍され、今も大学での研究に精進されていて、尊敬している。女性が第一線でご活躍するには、体力と精神力が大事である。そして、あきらめない忍耐力と研究を続ける意味を問い続けるその研究への思いがないと本当に研究者として続けることは難しいと考えさせられた。

また若手となる稲垣先生はキャリア女性の良いお手本といえる。30代であっても、独身であって、研究を続けている。それは女性の新たな生き方の見本といえる。

多くの女性は婚活を考える年齢に30代が多い。特にキャリアを積んだ女性が家庭に落ち着きたい年齢といえる。稲垣先生はキャリアをさらに積んで、研究を楽しんでいるように見受けられた。それだけ、研究という分野が良い環境だからといえる。

女性にとって、どんな生き方であろうと、様々な生き方があってよいと思う。みんなが同じ生き方ではつまらない。むしろ、様々な生き方があってこそ、自信にもつながる。

一生懸命にキャリアを積んで、仕事を懸命に精進する生き方や子どものために家庭に一生懸命に精進する生き方、それぞれが良いキャリアといえる。

女性という生き方が今、多様化しているなかで、私たちは、女性の生きるみちしるべを開拓し、支援し、サポートしていくことが重要といえる。多様化しているからこそ、多くの女性は生き方に迷い、その選択肢をさらに多様化させ、キャリアとは何かを見失ってしまう。そうなる前にそのキャリアを積んだ先輩たちの声をもっと広め、多様な選択が良い生き方をもたらす、そんな人生を知る手立てや勉強を伝えていくことが重要といえる。

本日の講義では、様々な生き方があり、それでもなお、キャリアを積んでいる女性の良い見本を見させてもらえた。女性だからこうあるべきという時代は変わりつつある。私たちがこれからの人生を豊かにするためには女性の声が重要であると考えさせられた。

* 環境情報学府 環境生命学専攻

M1 女

今回の先生方はお二方とも自然、特に災害を相手にした研究にも着目しており、藤原先生の講義の災害の中における植生の重要性から、続いての稲垣先生の講義の防災への地理的な研究への流れの中に自然と人との関わりは人工物が増えた中でもなお切り離せないものなのだとわかりました。

「女性キャリアパス」の講義を受けている人の中には私のように結婚や出産などといったものは、少なくとも在学中は縁遠いものだと考えている人が多いのではないかと思っていたのですが、「自分もいつ結婚することになるかわからないし、備えておこう」という考えの人も意外と多いことがわかり、自分のような人とそうした考えの人とでは受講後の思いも変わってくるのだらうと思いました。

* 環境情報学府 環境リスクマネジメント専攻

D1 男

○藤原先生

植生生態学がご専門とのことだが、2004年12月に大きな津波被害を出したスマトラ沖地震（M9）の被災地へのフィールドワークの話に興味を覚えた。理由は、復興前の段階での調査であったことである。現地では、女性であるが故に、男性以上の苦労があったのではなかろうか。

してみると、やはり学問の原点は、知的好奇心ということなのだろうか。調べると、学会でも指導的立場にいらっしゃるとのこと、講義を聴いて、納得した次第である。「好奇心が高じて学者を志す」の典型のようなキャリアでいらっしゃるようだが、現在の自分に置き換えて考えてみると、とても知的好奇心だけでは、学位など取得できないように思う。

また、「それなりの年月を、1つの分野に捧げれば、誰でもひとかどの人物（研究者）になれる」などとよく言われるが、それも必要条件ではあっても、十分条件とはとても思えない。特に、当学府では、論文を世に問う（レフェリー付雑誌への投稿）ことが学位取得の要件のようであるが、文系出身の私には、ちょっと想像がつかない。

当時と現在では違つかもしいないが、今後は、納得できる論文が出来てから、いかに世に問うてきたかについても伺いたいと思う。

○稲垣先生

お立場は、特別研究員とのこと。聞きなれないが、講義も担当されており、既に研究者の道を実践に歩んでいらっしゃるように思えた。ご自身では、「未婚で出産経験もないので、この講義に適切な講師かどうかは不明」と謙遜されていたが、最近の1ヶ月のカレンダーから、研究者生活の実態を報告いただく等、様々な工夫に好感を覚えた。

サラリーマンでもある私からは、学会やら研究活動で完全週休2日が実現していないことに率直に驚きを感じた。

学者と言えば、晴耕雨読のような印象がないでもなかったが、学内の会議等々もあり、自身の研究時間の捻出とて、容易ならざる状況に深い同情と若干の失望を感じた次第である。

* 環境情報学府 環境生命学専攻

D1 女

今回の講義は、主にお二人の先生が今日まで取り組んで来られた研究成果についてでした。講義内容とは関連が薄いかと思いますが、これを機会に、将来の研究者を育成するために学校でできることについて考えてみました。

研究者としての道を選択するきっかけは、「〇〇について研究したい」という具体的な目的がなくても、たまたま出会った課題が自分の研究対象となることもあるのだと思いました。男女を問わず、研究者として生きていくには知的好奇心の強いことは当然必要でしょう。将来の研究者を育てるには、理解したい、解明したい、伝えたいという思いや実践していく力を子どもの時から養っていくことがその一歩となるでしょう。学校教育では、研究者としての女性の生き方を伝える機会を作ることも必要ですが、知的好奇心と実践力を育む場面を日々の授業の中で作っていく努力をすることが大切だと考えています。そして、勉強が好きだ、知ることが好きだ、何でも面白いと感じられる生徒には、たとえその時点で本人に具体的な目的がなくても、進学後に会う面白いと感じる課題が先の研究目的になるから、研究者としての道を選択することもできるのだと伝えてあげたいと思います。

一般に、「研究をする＝大学院に行く」という方法はよく知られています。しかし、世の中には大学院だけでなく研究する場は多様に存在しています。その情報を、学校では生徒も先生も十分に把握していません。生徒の進路指導授業で、研究者への道はこんな方法もあると具体的に紹介できると良いと思います。できればこの「女性キャリアパス」の講義でも、女性が大学卒業後に、研究室に残らなくても研究が続けられる職種や

具体例についてお話しただけると今後の参考になり有難いと思っています。

さて、自分は博士課程前期と後期とでは研究分野が大幅に変わりました。この選択に際して随分迷いましたが、探究すること、知ることが好きで、思い起こせば今の研究分野は高校時代から興味があったものであり、希望している今後の教育活動にも充分活かせると考え進学を決意したという経緯があります。修士課程で学んだことは、分野が異なっても活かせるはずで、今回の講義を終えて、これも選択肢の一つだと思えるようになりました。今の研究室の先生方との出会い、そして頂けた新しい場、感謝しつつ納得のいくまでチャレンジしていきたいと思っています。

* 環境情報学府 環境生命学専攻

M1女

今回もまた貴重なお話を聞くことができとても参考になりました。

藤原先生の講義では最近よくニュースなどで耳にする“自然の保護・保全・回復・再生”への取り組みやそれを行うことがなぜ大切なのかということについて知ることができ、この取り組みは1人ではなくみんなが協力することで成果となることを知りました。そのためには1人1人の意識や心がけが必要であり植林活動等も重要ですが、やはり地球温暖化対策のためにゴミを減らしたり冷房の温度を高く設定したりすることが重要であると感じました。

女性キャリアパスを受講していて毎回感じることはどの先生方も自分の研究に誇りを持っており、とても生き生きしていらして毎回毎回「私も研究頑張ろう！」とパワーをいただいています。私は学部生の頃自分が取り組んでいた卒業研究が第一希望希のものにならなかったためにあまり好きになれませんでした。とにかく、こなすことだけを考え、卒業研究として発表できるデータを取ることを考えその研究がどのように応用されていってほしいかなどはあまり考えていませんでした。“こなす”ためだけだった研究は楽しむ余裕もなかったです。卒業研究としてのデータは取ることが出来たので卒業と同時に後輩に引継ぎましたが大学院生になりこの授業を受けるようになって「自分の研究を好きになってあげられなければ良い成果なんて出ないのではないか」ということに気づきかされました。院生になった今では研究テーマも新しくなり自分の研究がとても好きですが、学部生時代の研究にももっと誇りを持って取り組んでいたらもっと良い成果が出たのかなあ。とこの講義を受けるようになって思いました。

3限の藤原先生の講義では、植生についてのお話をうかがいました。主に、人間の力や伐採などと ecology との関係性、自然やリスクとうまくつき合うことについても、お話を伺うことが出来ました。例えば、マングローブ林が津波エネルギーを吸収することや、常緑樹によって火災を止めることができる、特に根の強い木は倒れることなく防火に有効であることなどを、初めて知りました。また、川の自然の力により、土地が肥沃化され、植物が生えること、乾燥地帯では、種をまく前に種を焼くことにより堅い殻がこわれて、発芽することができるというようなことについても知りました。また、“three rules of ecology”として、風が吹けば桶屋が儲かる (Everything is connected to everything else.)、覆水盆に帰らず、タダ飯はない (この2つについての英語表現は、時間内に書き取りきれませんでした。) 、というように ecology に関して概念的にも学ぶことも出来ました。先生は実際に山でフィールドワークをされ、その一期一会に感動され、好奇心を持つとともに、ご自分が持った問題意識を原点に研究され、また、それについて社会全体にも知ってほしいという思いをお持ちだとおっしゃっていました。保全とは、守り、利用しながら、育てることであり、それが生物多様性の維持につながる。「センスオブプレイス」を理解して、未来に続く創生、再生をしていくという、先生の実践者としての強いメッセージが伝わってくる講義でした。

4限の稲垣先生の講義では、先生のご経歴や研究室で実際に取り組まれてきた内容についてお話だけしました。博士前期課程をご卒業後に助手となられ、博士号を取得され、現在は特別研究教員をされているということで、順調に研究者の道を歩まれているような印象を持ちました。安全で安心な街を目指し、都市防災研究をされているとのこと、現地調査も多くされているようでした。被災地の直後の様子や、その後の再生の様子を実際に目にするには、未来に起こるかもしれない災害の予防や復旧を考える上でとても重要なことだと思いました。被災後まず、ライフラインの復旧最適化が必要ですが、例えば蓄熱式空調システムを断水時には転用すること、逆に、非常用発電システムのような非常時のみに使われるような高価な高機能設備の常時転用の検討、隣り合う建物との共用などの、具体的なアイデアについて知ることができました。また、学生への教育の一環としてエコスカイハウスという環境共生建築で学生実習を行っていたり、和田町の高架下の落書きをいろいろなグループの人々と協力することによってなくすことにも成功するなど、人間生活に直結するような研究をされているという印象を持ちました。政策、施策に関連すること、学生の教育、所属する研究室での関連研究テーマなど、いろいろと幅広く経験を積み、生き生きと研究されている先生の様子が印象的でした。

* 環境情報学府 環境イノベーションマネジメント専攻

D1 男

藤原先生はフィールドワークと海外研究者との交流の重要性について「一期一会」をキーワードに経験談を述べて下さった。稲垣先生は「私は駆け出しの研究者で、教授でもなければ准教授でもなく、結婚もしていなければ、子供も産んでいないのでこの場でお話しするのは・・・」という前置きから、そして現在進めている研究について説明してくださった。とても謙虚で好感のもてる先生でした。どの先生方もすばらしいキャリアパスをお持ちで、とても参考になります。

* 環境情報学府 情報メディア学専攻

M1 男

今回の担当は藤原先生と稲垣先生でしたが話をお聞きしていて面白いと思ったのは藤原先生のお話でした。木というものが我々の想像をはるかに超えた重要な役割を地球環境に置いて持っていることがわかりました。津波の威力軽減に始まり、地震の威力軽減、温度変化の軽減等、樹木によって我々が守られているのだということを痛切に感じましたしかし、その一方で浅い環境に対する知識から自然林を破壊し、お金になる代用樹木を植えたり、拳句の果てには一国を超える分の樹木数十年から数百年の木をコンクリートを使用する際などのさして重要でないことのために伐採するなどの愚かしい行為とその結果残されたものをみて環境に対して今までよりももっと真摯に向き合っていかなければならないと感じました

環境情報学府 環境生命学専攻

D2 女

藤原先生の講義は生態学という私にとって大変興味深い内容であったため、印象に残りました。また、地球環境の大切さなど改めて実感したとともに何としても現状を変えなくてはならないと再認識しました。

稲垣先生はおそらく今まで話して下さった先生のなかで、私たちに最も年齢が近かったのではないかと思います。環境に関する地域との取り組みなどについての講義だったが、とてもわかりやすく、また今までこのような取り組みをしていたのか、という新しい発見もあり、先生の知識の幅広さを感じました。